

アメリカにおける特別活動の先行研究に関する 包括的批評論文をめぐる近年の論争について

東京家政学院短期大学 山田 順子

1. 本稿のテーマの背景

本誌の前号における「特別活動⁽¹⁾への参加と学業成績の関係に関する日本およびアメリカでの実証的研究について」の執筆に際して目を通したアメリカの諸論文において、いくつかの基本的かつ重要な問題についての議論がかなりの年数を経てもなおしばしば繰り返されていることに気付いた。これが、本稿で取り上げるテーマに関心を持つ契機となった。

例を挙げると、学校教育における特別活動の名称や位置付け等の基本的なことについても、未だ合意を見るに至っていないのである。

NASSP⁽²⁾の生徒指導部門部長である Dale D. Hawley は、1989年に NASSP から刊行された冊子⁽³⁾の序文において、「長年にわたり様々な名称で呼ばれ、歴史的にも数々の議論を招いてきたが、いまだにすべての人々に受け入れられるような名称は出てきていない」と述べている。

また、特別活動を、学校教育において学業に劣らぬ重要なものとするか否か、という議論が常に繰り返されてきたことは、1960年代に Anderson ら (1963)⁽⁴⁾が指摘しているし、最近のものでは Camp (1990)⁽⁵⁾も同様の指摘をしている。そして、この問題と関わりが深い、学業成績による特別活動への参加制限の是非についての議論も、今なお繰り返されているといった具合である。

2. 本稿の目的および方法

(1) 目的

本稿では、1987年に発表されたアメリカにおける特別活動の先行研究に関する包括的批評論文に端を発した論争の大筋を追いつつながら、この一連の論争により何が明らかになったのかを検証し、その成果をこの分野の研究や実践にどう生かしていくべきかについても考察したい。

(2) 方法

まず、論争の発端となった Holland & Andre の論文 (1987)⁽⁶⁾、そしてそれに対する Taylor & Chiogioji (1988)⁽⁷⁾と Brown (1988)⁽⁸⁾の批判論文、最後に批判論文への Holland & Andre の反論 (1988)⁽⁹⁾という順序で各々の論文の要点を紹介したい。

そして、この論争を通して明らかになったことは何か、それを今後の研究や実践にどう生かしていくべきか、を考察したい。

3. 各論文の要点および論争の焦点

この論争は、Review of Educational Research 誌上で展開されたものである。以下に、各論文の要点⁽¹⁰⁾と論争の焦点をまとめた。

(1) Holland & Andre (1987) の要点

この論文は、アメリカにおける特別活動に関する過去の研究を包括的に批評したものの中では、著者の知る限りでは、分析対象となっている論文数が最も多く、かつ広い領域をカバーしているものである。この点については、1989年5月のKappan Special ReportにおいてLewis⁽¹¹⁾が同様の指摘をしている。次に、その内容を少し詳しく紹介したい。

①論文の目的および構成

彼らの論文のタイトルは、『中高等学校における特別活動への参加について——先行研究によって既に明らかにされていること、及び今後解明されるべき事柄——』である。

彼らは、この論文の主要な目的として、(a)特別活動に関する先行研究における実際的な研究結果の提示、(b)方法論上の批評、(c)将来の研究の方向付け、の3点を挙げている。

この論文は、次の3つの主要部分と付録から構成されている。(a)特別活動への参加に関する先行文献への批評、(b)研究方法に関する批評・特別活動に関する研究の一般的限界、(c)将来の研究の方向付け。さらに、付録として、取り上げた研究の主要特性（サンプル、分析テクニック、独立要因と従属要因、結果の概要等）の一覧表。

②先行研究が明らかにしていること

「既に明らかにされている事柄」として、(a)個人的特性と社会的特性、(b)学業成績と運動競技への参加、(c)教育上の抱負と成果、(d)特別活動への参加の度合い、(e)特別活動を取り巻く社会的状況、の5つの領域に分け、先行研究に検討を加えている。

その結果を要約すると、以下の通りである。「特別活動への参加は、次のものと相関関係がある。それらは、比較的高い自己評価、人種間の関係の改善、青少年期における政治的活動や社会的な活動への関心、男子生徒における学力と学業成績、教育上の抱負と成果、自己の人生への統制感、比較的低い非行率、である。だが、特別活動への参加と望ましい特性との間に、因果関係は認められなかった。」

③特別活動に関する研究の限界

彼らは、先行研究に見られる研究の限界を、次の5つの項目に分けて論じている。以下に、その要点をまとめた。

1) 自己選択

参加者と非参加者の分類は、生徒達の自己選択によっている。このことによる危険性は、特別活動による参加の実際の効果ではなく、参加しないし非参加を選択した生徒のグループ間に存在する以前からの相違が、参加したか否かによって生じたものと見なされるかもしれないというところにある。本来なら、この自己選択の危険性を認識し、その影響を最小限にとどめる手段を講じるべきであるが、検討対象となった研究の多くはそれをしていない。

2) 調整要因と社会的状況

特別活動への参加や参加することがもたらす結果と相互作用を持つ要因（例えば、家庭環境、地域社会の価値観、生徒の能力、学校の規模、特別活動への参加の程度、自己評価など）を十分に考慮に入れ、地域社会の社会的環境を的確に把握しつつ、相互に作用している要因間の関係を分離させる分析手法を用いるべきであるが、検討対象となった先行研究においては充分とはいえない。

3) 長期計画

計画上の重大な欠陥は、長期的な研究がなされないことである。

長期計画は、特別活動への参加経験とその結果もたらされる要因との因果関係を、より正確に評価させるものとなる。そのために必要な期間は特に長いわけではなく、次のデータ収集との間に1～2年の期間を置くだけでも、要因間の相互関係に関する貴重な情報が得られる。

4) サンプルの質

先行研究のサンプルの質にはかなりのばらつきがある。より多くの適切なサンプルが望ましいことは言うまでもないが、調査研究の現実を考慮に入れると、今後も、便宜的サンプルを使用するものと、より適切なサンプルを使用するものとの、両方の研究がなされるであろう。便宜的なサンプルを使った研究を控えるべきだと考えているわけではないが、そのようなサンプルには十分な説明を加えるべきである。

5) その他の問題

例えば、参加期間の長さ、参加のタイプ、参加したことによる成功の度合などについて、明確に査定されていない。

また、多くの研究が、数校からのサンプル収集をしながら、分析の際に個々の生徒を抱える学校を要因の1つとして考慮していない。

6) 論理的分析

大部分の研究は、研究の詳細な論理的根拠や、特別活動への参加が個人の成長に影響を与えるという過程の論理的説明をしていない。

④将来の研究への方向付け

既述した先行研究の弱点を克服するには、(a)予言要因、(b)状況要因、(c)過程要因、(d)結果要因、の明確化が有効である。

なお、「⑤特に必要とされる研究」については、紙面の都合により割愛する。

(2) Taylor & Chiogioji (1988) の批判

Holland & Andre (1987) に対する彼らの批判の要点は、以下の通りである。

「彼らの論文は、論理的枠組及び主要語彙（例えば、『特別活動』や『青少年の成長』）の定義を欠き、取り上げている研究に偏りがあり、均衡を欠いている。また、彼らの結論を引き出すには、彼らが批評の対象としている研究だけでは範囲が狭過ぎ、不充分である。それゆえ、将来の研究の方向付けに関する彼らの提案も、説得力を欠く。」

Taylorらは、Hollandら（1988）への批判論文を、「もし、彼らの研究に1つでも成し得たものがあるとすれば、それはこの領域における将来の研究の必要性に、我々の注意を向けさせた点であろう」という手厳しい評価で結んでいる。

(3) Brown (1988) による批判

彼の批判の要点は、以下の通りである。

「中高等学校における特別活動への参加に関する研究は、概念的枠組を欠いており、方法論上に問題が多く、誇大評価や過大解釈の傾向がある。Hollandらの論文はこれらの欠点を指摘しているが、先行研究の結果を好意的に解釈し過ぎたり楽観的な要約を提供するにとどまり、より啓発的な研究を生み出すのに必要なはっきりした方向付けがない。」

(4) Holland & Andre (1988) による反論

Hollandらは反論の中で、「TaylorらとBrownの批判は、自分たちの論文の長所や短所について相反する意見を述べている」と再三主張しているが、著者には、全体としてむしろ類似点の方が目立つように思われる。

例えば、TaylorらもBrownも、特別活動が青少年の成長に果たす役割を評価している点ではHollandらと同じであり、また両者ともにHollandらの論文には論理的枠組が欠けていることを指摘し、先行研究に対する解釈や評価が適切でないと批判している。

Hollandらは、論理的枠組の欠如という批判に対して、「我々も彼らと同様に、特別活動に関する研究がもっと論理的なものになるべき必要性について論じている。だが、我々の目的は、既存の論理を批評したり、特定の理論を発展させたりすることではなかった。我々の目的は、特別活動の影響に関する研究を要約し、統合し、批評することであり、将来の研究の方向について提案することだった」と反論し、さらに執筆規定に合わせるために大幅に削除せざるを得なかった原文には、批判された他の点に充分応え得る内容が盛り込まれていたのだ、とも述べている。

彼らが、自分たちの論文に向けられた批判の中で認めているのは、「主要語彙が適切に定義されていない」という点であるが、彼らはまた「そのことが重大な結果を及ぼしているとは思わない」と反論し、むしろこのことゆえに先行研究に関する包括的な批判論文が可能になったのだと主張している。

4. 一連の論争から明らかになったこと

Hollandらの論文(1987)は、カバーしている領域の広さや取り上げている論文数の点で、これまでのものの中では特別活動に関する最も規模の大きい包括的批評論文といってよいと思う。

しかし、同時に、後に続く批判論文やそれに対する彼らの反論により、①執筆者自身の論理的枠組をどの程度打ち出すべきか、②どのような論理的枠組に基づいて分析を行うべきか、③個々の先行研究の成果に関する解釈上の問題、④この分野の各領域における代表的な研究をもれなくカバーしているか、等の点で、批判される余地のない論文を書くことのむずかしさを再確認させるものであったように思う。

5. 今後の課題

Hollandらは、自分たちの論文に対する批判への反論論文の最後を、「我々は皆(両批判論文の著者らも含めて)、1つの重要な点において同意している。それは、青少年期の成長発達における特別活動の役割に対するより完全な理解を促すために、この分野におけるより包括的な研究が必要とされているということである」という文章で結んでいる。

だが、著者は、アメリカにおいては特に、より包括的な研究を目指すよりも、むしろある程度狭い範囲にテーマを絞って、その分野での徹底した先行研究の検討を行い、それを踏まえた研究を積み上げていく方が、効率的ではないかと思う。Hollandら(1987)は「参加に関する非常に規模の大きい包括的な研究が現実的でないとするば、小規模の研究の集積により、参加の与える影響に関するより完璧な姿が分かってくるのではないだろうか」とも述べているが、これは我が国の場合を考えてみても頷けるものである。

我が国の特別活動に関する研究について、片岡ら(1993)⁽¹²⁾は、「多くは哲学的・理論的な研究であり、実証的な研究は少ない」と指摘している。今後の実証的研究については、その背景に関して質の高い豊かな情報が得られるようであれば、例えサンプル数が多くなくとも一箇所から集めたサンプルの方が有用であり、かつ調査研究の実情に即しているように思う。そして、その際に不可欠なのは、小学校・中学校・高校の実情を熟知している教員と、先行研究についての情報や理論的側面、分析手法などに詳しい研究者との、緊密な連携であろう。

注

- (1) アメリカの学校教育における我が国の特別活動の内容に匹敵するものを表わす用語としては、筆者が見る限りでは現在 extracurricular activities や student activities がよく用いられているようである。この英語に沿って訳すと、「教科外活動」や「生徒活動」となるが、本稿でも、前号の拙稿でも、無用の混乱を避けるために、すべて「特別活動」という訳語に置き換え、アメリカのものも我が国のものも、ともに

「特別活動」とした。

Anderson & Van Dyke (1963) は、ハイスクールの学校経営について論じた本の中で、「extracurricular」というと、何か教科以外の活動を意味しているかのようである」と述べ、彼らの著書の中では extraclass activities を使っている。彼らの主張には頷けるところが多いが、アメリカの文献の中では今のところ extracurricular activities の方がよく使われているので、欧文題目での論文検索の際の便を考慮して、本稿でも、また本誌前号の拙稿でも、欧文題目にはこちらを用いた。

(2) National Association of Secondary School Principals

(3) Biernat, Nancy A. ・ Klesse, Edward J., *The Third Curriculum: Student Activities*, National Association of Secondary School Principals., 1989.

(4) Anderson, Lester W. ・ Van Dyke, Lauren A., *Extraclass Activities and Their Management*, *Secondary School Administration*, Houghton Mifflin Company., 1963, pp.208-231.

(5) Camp, William G., "Participation in Student Activities and Achievement: A Covariance Structural Analysis", *Journal of Educational Research*, Vol.83, No.5, 1990, pp.272-278.

(6) Holland, Alyce. ・ Andre, T., "Participation in Extracurricular Activities in Secondary School: What Is Known, What Needs to Be Known?", *Review of Educational Research*, Vol.57, No.4, 1987, pp.437-466.

(7) Taylor, John L., ・ Chiogioji, Eleanor N., "The Holland and Andre Study on Extracurricular Activities: Imbalanced and Incomplete", *Review of Educational Research*, Vol.58, No.1, 1988, pp.99-105.

(8) Brown, B. Bradford., "The Vital Agenda for Research on Extracurricular Influences: A Reply to Holland and Andre", *Review of Educational Research*, Vol.58, No.1, 1988, pp.107-111.

(9) Holland, Alyce. ・ Andre, Thomas., "Beauty Is in the Eye of the Reviewer", *Review of Educational Research*, Vol.58, No.1, 1988, pp.113-118.

(10) これは、各論文の冒頭にあるその論文の執筆者自身による要約の和訳ではなく、その論文全体に目を通した上で、著者なりにまとめたものである。従って、各論文の冒頭にある執筆者による要約とは、必ずしも内容が一致しない場合もある。

(11) Lewis, Anne C., "The Not So Extracurriculum", *Phi-Delta-Kappa*, vol.70, No.9, 1989, pk.1-8.

(12) 片岡徳雄・倉田侃司・島田俊郎・白松賢「特別活動に関する意識調査——中学校を中心として」、日本特別活動学会第2回大会発表要旨集録、1993、pp.13-14.

引用・参考文献

(1) Anderson, Lester W. ・ Van Dyke, Lauren A., *Extraclass Activities and Their Management*, *Secondary School Administration*, Houghton Mifflin Company., 1963, pp.208-231.

(2) Biernat, Nancy A. ・ Klesse, Edward J., *The Third Curriculum: Student Activities*, National

Association of Secondary School Principals., 1989.

- (3) Brown, B. Bradford., "The Vital Agenda for Research on Extracurricular Influences: A Reply to Holland and Andre", *Review of Educational Research*, Vol.58, No.1, 1988, pp.107-111.
- (4) Camp, William G., "Participation in Student Activities and Achievement: A Covariance Structural Analysis", *Journal of Educational Research*, Vol.83, No.5, 1990, pp.272-278.
- (5) Holland, Alyce. · Andre, T., "Participation in Extracurricular Activities in Secondary School: What Is Known, What Needs to Be Known?", *Review of Educational Research*, Vol.57, No.4, 1987, pp.437-466.
- (6) Holland, Alyce. · Andre, Thomas., "Beauty Is in the Eye of the Reviewer", *Review of Educational Research*, Vol.58, No.1, 1988, pp.113-118.
- (7) 片岡徳雄・倉田侃司・島田俊郎・白松賢「特別活動に関する意識調査——中学校を中心として」、日本特別活動学会第2回大会発表要旨集録、1993、pp.13-14.
- (8) Lewis, Anne C., "The Not So Extracurriculum", *Phi-Delta-Kappa*, Vol.70 No.9, 1989, pk.1-8.
- (9) Taylor, John L., · Chiogioji, Eleanor N., "The Holland and Andre Study on Extracurricular Activities: Imbalanced and Incomplete", *Review of Educational Research*, Vol.58, No.1, 1988, pp.99-105.